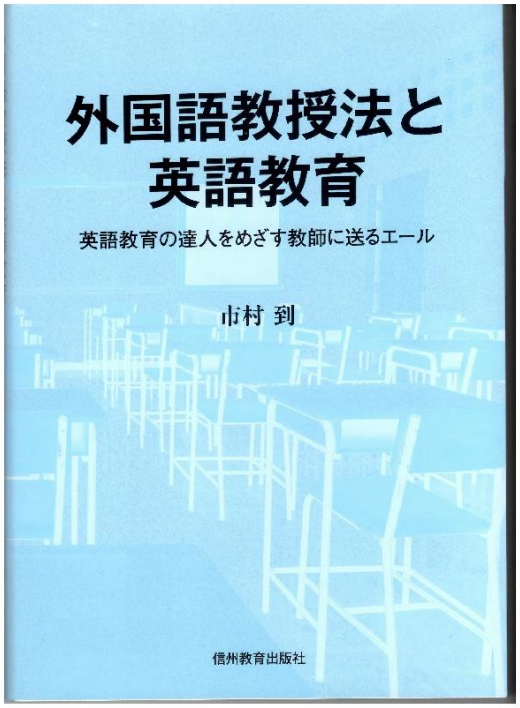
市村到君著「外国語教授法と英語教育」を読んで

原田義則（3 組）



市村到君(4 組)の最新刊「外国語教授法と英語教育」を読みました。副題に「英語教育の達人をめざす教師に送るエール」とありますが、市村君の歩んだ英語教師人生の集大成とも言える一冊で、市村君が英語教師として得た体験や知識を体系化しています。2 部構成になっており、第一部では母語で無い言語を教える様々な技法・スタイルをグローバルな観点から網羅的に概説し、歴史的変遷も含めて教育法のトレンド分析をしています。第二部では特に日本における英語教育の変遷と方向性を論じています。

筆者が「我が意を得たり」と大いに共感させられたのが、第二部で強調している「英語教育においてはコミュニケーション能力の育成が肝心」と言うところです。

実は筆者は筑波大学の大学院で筑波大学＋国立台湾大学＋フランス・ボルドー大学の 3 大学が連携して運営している学位プログラムの学生達を対象とした「起業家マインド育成(Entrepreneurship Training)」と言う授業を毎年、英語で実施しています。この授業は私が企業での経験を基に 10 数年前に立ち上げたのですが、招聘講師達のちょっとした成功と数多くの失敗から学生達に「プロジェクトの遂行に必要な重要なファクターは何か」を学んで貰おうとしています。プロジェクト・マネージメントの観点から新規ビジネスを立ち上げる（起業）ために必要な知識・考え方と基本スキルとを教えるものですが、この授業の真の目的は研究・開発プロジェクトの立案や運営、更にはその後の人生でより良いキャリアパス形成に有用と思われる肝心な要素「起業家マインド」を学ばせるもので、座学ではなく、グループ学習を中心として体験しつつ学習して貰うことを特長としています。プロジェクトの遂行において重要な

因子として良く「人、モノ、金」があげられますが、その授業に中で私は自分の経験から、特に最も重要なファクターは「人」であり、「ヒューマン・リソース・マネジメント（HRM：人的資源管理、人材マネジメント）がプロジェクトの成功・失敗を決める」と教えています。更にその HRM の基礎であり、特に最も重要なスキルは「コミュニケーション力」であると強調しています。

市村君の著作にある「英語教育はコミュニケーション能力の育成を目的とする」との立場に私は大いに共感します。一方、英語教育のことを述べているにも拘らず、本の中で市村君は「意思を伝えるコミュニケーションの中で言語の占める割合は 7%に過ぎない」との「非言語的要素の重要性」を強調する学説も紹介しています。市村君は「英語授業」は英語を教えるのではなく、「コミュニケーション力を向上させるための手段の一つとして英語という言語を用いている授業である」とのスタンスに立っているものと感じられました。

筆者は常日頃、「英語はコミュニケーションを成立させるためのツールの一つであり、学校教育の科目として成績を順位付けして評価の対象となっていることは間違い」と考えています。「英語の出来る子供は頭が良い」と思わせる体制がおかしいと言うことです。

英語が特に「知的な言語」と言う訳ではありません。筆者が若い頃に、ロンドンに行った際に立ち寄ったパブでの知的障碍者と居合わせた客とのトラブル、駆け付けた警官との遣り取りの一部始終を見ていて「知的障碍者であってもちゃんとした英語が喋れる！」ことを目撃しました。イギリス人だったら英語で喋るのは当たり前のことですが、それまで「英語の出来る人は頭が良い」と何となく思っていた私にとって「目からうろこ」の時間でした。

英会話は流暢であることに越したことではないものの、必ずしも正しい文法や綺麗な文章である必要はなく、何とか遣り繰りして意思を伝えることが最も重要だと思います。「英語教育はコミュニケーション能力の育成を目的とする」との市村君のメッセージを胸に、「今年のマネージメントの授業もしっかりやろう」との思いを新たにしました。

以上

2022 年 2 月 14 日　記